

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03366

研究課題名(和文) 子どものふり遊びを促す働きかけの質的要因の検討

研究課題名(英文) Investigation of qualitative factors for encouraging toddler's pretend play

研究代表者

伴 碧 (Ban, Midori)

大阪大学・大学院基礎工学研究科・特任講師(常勤)

研究者番号：30755658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大人がどのような働きかけを行うことが乳幼児のふり遊びを促すか明らかにすることを目的とした。その結果、「発話(オノマトペ)」という働きかけが有効であることが示された。また、研究期間中は、新型コロナウイルス感染症の影響により、乳幼児を対象とした実験を対面で行うことが困難であったため、複数のオンライン調査を実施した。具体的には、乳幼児期の子どもを持つ母親が、子どもの「心」をどのように捉えているかについて印象評価を行ったり、ふり遊びでよく扱われる「食べ物」の印象について、子どもがどのような認知をしているか調査を行うことで、乳幼児期のふり遊びを促す要因の検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で、乳幼児期の子どものふり遊びを促すための具体的な働きかけが明らかになったことで、若い年齢の子どもに対する働きかけの指針が明確になり、保護者や保育者が子どもの発達を意識的にサポートすることが可能となる。さらに、オンライン調査の結果から、乳幼児期の親子のコミュニケーションや絆の形成を促すうえで、子どもの発達の重要なマイルストーンを、母親の視点から明らかにすることができたことは意義深いと考える。加えて、ふり遊びで良く用いられる「食べ物」についての子どもの認知を調査することは、食育の観点からも重要であり、子どもたちが食べ物をどのように認知し、興味を持つかを理解する手助けとなりうる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify the types of interventions by adults that effectively encourage pretend play in infants and toddlers. The results indicated that using "speech (onomatopoeia)" was particularly effective. Additionally, due to the impact of the COVID-19 pandemic, it was challenging to conduct face-to-face experiments with infants and toddlers during the research period, so multiple online surveys were carried out instead. Specifically, the surveys involved mothers of young children evaluating their impressions of how they perceive their child's "mind" and investigating children's cognitive perceptions of "food," which is often used in pretend play. This multi-faceted approach was used to examine the factors that promote pretend play in early childhood.

研究分野：発達心理学

キーワード：ふり遊び ふりシグナル 乳幼児 mind perception

1. 研究開始当初の背景

子どもは様々な能力を、遊びを通して獲得していく。遊びのなかでも早期から子どもの想像力を促すものとして、1歳半から始まる「ふり遊び(pretend play)」が挙げられる(e.g., Bergen, 2002)。ふり遊びとは、モノAをモノBの代用品として用いる(e.g., 空のコップをジュースが入っているコップとして用いる)、または人物Aが人物Bの役割を引き受け行為する(e.g., 自分がアンパンマンになったかのような行為をする)ことを指す(高橋, 1996)。このように「ふり」が出来るということは、現実とは別の想像の世界を持たせたことの表れと言える(石川, 2019)。そして、ふり遊びを行うためには、自分とは異なる相手の立場に立ち、他者と想像を共有することが必要となる。そのため、ふり遊びは、他者の視点に立つことが求められる「心の理論(Theory of Mind)」との正の関連が見られたり(e.g., Moriguchi, Ban et al., 2016)、他者の感情理解や子どもの社会性を促したりすることが示されている(e.g., Lillard & Kavanaugh, 2014)。このように、ふり遊びを行うためには、相手の想像の意図を理解し、想像を共有するという高度な能力が必要となる。では、どのようなプロセスを経て、子どもはふり遊びを行うようになるのであろうか。

その答えとして、大人による働きかけが挙げられる。1歳半という幼い年齢であっても、子どもは大人からの働きかけがあることで、他者のふりを理解し、他者と想像を共有できるようになる(e.g., Ban & Uchiyama, 2015; Lillard et al, 2017)。そして、他者のふりをしていることを理解し、他者との想像の共有を促すための働きかけは、「ふりシグナル(pretense signal)」と呼ばれる。ふり遊びでは、「これは遊びである」というメッセージが、ふりシグナルによって他者に伝えられる(飯島, 2003)。例えば大人が「ふり遊び」をしていたとしても、ふりシグナルがなければ、乳幼児期の子どもは、大人のふりを理解することが難しい(伴・内山, 2015)。そのため、乳幼児期の子どもは、ふりシグナルを通じて「これは本当(現実)じゃなく、嘘っこ(ふり)だ」ということを理解するようになる。

これまでのふり遊びを対象とした研究から、子どものふり遊びを促すうえで、保育者による働きかけが重要な役割を果たすことが報告されているものの(e.g., 荒木他, 2016)、先行研究の多くは、事例研究や(e.g., 石川, 2019)、ふり遊びに関する量的な相関研究にとどまっているのが現状である(e.g., Lillard & Witherington, 2004; Nakamichi, 2015)。加えて「保育所保育指針」では、「それぞれの子どもの発達状況に応じて、遊びや関わりの工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要である」とあるが(厚生労働省, 2017)、実際にどのような働きかけを行うかについては、個々の保育士に委ねられている。そのため、子どものふり遊びを促す具体的な働きかけについて、実証的な見解が未だ示されておらず、明確な指針がないという問題が挙げられる(e.g., 三好・石橋, 2006)。

2. 研究の目的

そこで本研究では、ふりシグナル以外の要因を統制した実験的手法を用いて、「ふりシグナルの種類やその組み合わせ」といった質的な側面に着目し、子どものふり遊びを促すための具体的な「ふりシグナル」を明らかにすることを目的とする。本研究の学術的独自性と創造性として、これまで量のみでの検討が行われてきた「ふりシグナル」について、「どの種類を、どの程度提示することが効果的か」といった質的な側面に着目したことが挙げられる。子どものふり遊びを促すための具体的な「ふりシグナル」を特定することで、保育者の負担が少なく、保育・教育・療育現場においてすぐに実用可能、かつ実際に効果のある知見を提供することができるという点で、本研究は意義深いと言える。

3. 研究の方法

研究当初は、ふり遊びがはじまる年齢の乳幼児(1歳半児~3歳児)を対象に、大学の実験室における統制された環境下での心理実験から、子どものふりを促す具体的な「ふりシグナル」を明らかにすることを想定していた。しかし、研究期間開始の2020年から、新型コロナウイルス感染症(COVID19)の影響により、緊急事態宣言の発令およびまん延防止等重点措置適応のため、大学の実験室において乳幼児を対象とした心理実験を対面で行うことが困難となった。そのため、これまでに取得したデータの分析および、およびオンライン調査を行うことで、子どものふり遊びを促す働きかけ、およびふり遊びを取り巻く要因について検討を行った。

4. 研究成果

研究期間は、取得したデータの分析および論文化、オンライン調査の実施、分析、および論文化を行った。加えて、今後の実験を見据えて、実験協力をしてくださる園(フィールド)の探索を行った。その結果、幼稚園および保育園一カ所ずつと提携することが出来た。このように、大学の実験室だけではなく、学外でのフィールドを確保できたことは大きな成果といえる。

以下に、それぞれに成果について詳細を述べる。

1. 乳幼児のふり遊びを促すためには、大人がどのような働きかけを行うことが効果的か

乳幼児のふり遊びを促すために効果的なふりシグナルを明らかにするために、ふりシグナル以外の要因を統制した実験的手法を用いた検討を行った。具体的には、ディスプレイ上に複数のふりシグナル(「笑顔」、「発話(オノマトペ)」、「笑顔+発話(オノマトペ)」)を提示し、それ操作することで、具体的にどのような大人の働きかけが、乳幼児のふり遊びを促すかについて実験的検討を行った。その結果、「発話(オノマトペ)」という働きかけが、乳幼児のふり遊びを促すうえで有効であることが示された。一方で、「笑顔+発話」といった複数種類を組み合わせたふりシグナルを提示すると、乳幼児は大人の行為(食べるふり)を現実と混同させてしまい、「ふりである」と理解することが困難になることが示された。新型コロナウイルス感染症禍において、乳幼児と直接触れ合うことが制限され、オンラインでの対話・遊びが主流となる中、ディスプレイ上でふりシグナルを提示することで、子どものふり遊びを促す働きかけについて検討を行い、その効果を示した本研究は意義深いと考える。

2. 乳幼児期の子どもを持つ母親が、子どもの「心」をどのように捉えているか

新型コロナウイルス感染症禍のため、実験室実験の実施が困難であったため、乳幼児のふり遊びを促す要因について、オンライン調査を実施した。具体的には、乳幼児の子どものどのような行動が、母親に「子どもの心(mind perception)」を知覚させるかについて検討、論文化を行った。

1歳半という幼い年齢であっても、子どもは大人からの働きかけがあることで、他者のふりを理解し、他者と想像を共有できるようになる(e.g., Ban & Uchiyama, 2015; Lillard et al, 2017)。そのため、子どもがふり遊びを開始し、継続するためには、大人側からのコミュニケーションが重要となる。しかし、母親が自身の子どもを「コミュニケーション相手」として捉えるためには、子どものどのような行動(e.g., ハイハイ)が鍵となるかについてはこれまで検討が行われてこなかった。そのため、0歳から2歳までの母児を対象にオンライン調査を行うことで、母親が子どもを「一人の人間」として近くするためのマイルストーンを明らかにすることを目的とした。

その結果、子どもの年齢が0ヵ月から6ヵ月までは、子どものどのような行動も、母親が子どもの心を知覚するうえで影響しないことが明らかになった。しかし、子どもの年齢が7ヵ月から12ヵ月では「声のトーンから親の感情を理解することができる」、13ヵ月から18ヵ月では「泣いている理由が明確である」、「初語が出現する」、19ヵ月から24ヵ月では「泣いている理由がはっきりする」などの子どもの行動が、母親が子どもの心を知覚するうえで関連することが明らかとなった。このように本研究から、母親が子どもの心を知覚し、コミュニケーション相手としてみなすための子ども側の行動が具体的に明らかとなった。さらに、母親の知覚に影響する子ども行動が子どもの発達段階に応じて変化することもまた明らかとなった。

3. ふり遊びで用いる玩具は子どもの年齢に応じて変化するか

ふり遊びの中で、子どもは玩具を別の物であるかのように扱い(e.g., 食べ物)、遊びを展開していく。ふり遊びで用いられる玩具は、「現実ではない」ことを示すうえでの象徴物となる(Bunce, Harris, Bunce & Harris, 2013)。そして、近年の研究から、年齢発達に応じてふり遊びにおける玩具の好みが変わることが示されている(Taggart, Heise, et al., 2018)。例えば、3歳以上になると、大人と同様の実物を好む(e.g., 玩具ではなく、本物のナイフを用いることを好む)ようになることが示されているが、ふり遊びが始まる乳幼児期においても、ふり遊びで用いる玩具の好みは変化するのだろうか。これを明らかにするために、18ヵ月、24ヵ月、そして30ヵ月の乳幼児を対象に、「ままごと遊び」を行う際にどのような玩具を好むかについて、検討を行った。なお、本研究は、新型コロナウイルス感染症禍以前に取得していたデータであり、研究期間中にデータの分析および論文化を行った。

その結果、18ヵ月の子どもは、ままごと遊びにおいて明るい色の玩具の食器を好むことが明らかとなった。一方、30ヵ月の子どもは、本物の食器を好むことが示された。この結果は、30ヵ月の年齢であっても、3歳児同様に、本物を好むようになることを意味するものである。さらに、乳幼児期の発達段階に応じて、ふり遊びで用いる玩具の好み異なることが明らかとなった。このように、ふり遊びを取り巻く「玩具」という要因についても、年齢発達の違いがあることを見いだせたことは、子どものふり遊びを促すうえで意義深いと考える。

4. 子どもは「食べ物」の見た目についてどのような認知をしているのか

新型コロナウイルス感染症禍のため、実験室実験の実施が困難であったため、子どものふり遊びを促す要因について、オンライン調査を実施した。ふり遊びの状況として、その多くは「ままごと」遊びが用いられるなど、「食べるふり」を行う場面が多い。そのため、子どもが食べ物の見た目についてどのような認知をしているかを明らかにすることを目的とした。

具体的には、食べ物の「色」と「形」とを操作し、子どもが「色」と「形」のどちらによって、食べ物の季節(e.g., 春)を判断しているか検討を行った。その結果、子どもは食べ物の「形」ではなく「色(e.g., ピンク色)」から季節を判断していることが明らかになった。この結果は、幼い子どもに対しては、色鮮やかなものを提示することで、食べ物の認知を促せる可能性を示唆するものである。なお、現在は提携先の幼稚園をフィールドとして、実際に子どもに食べ物を提示し、その評価を行わせたり、率直な意見をインタビュー形式で取得することで、食べ物に対する子どもの認知について更なる検討を行っている最中である。

以上のように、本研究期間は、新型コロナウイルス感染症(COVID19)の影響により、長期間実

験室実験が困難であったが、オンライン調査を行うことで、多角的観点から乳幼児期のふり遊びを促す要因の検討を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伴 碧 , 内山 伊知郎	4. 巻 47
2. 論文標題 単独のふりシグナルは幼児のふりの理解を促すかーふり場面と現実場面との比較からー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 応用心理学研究	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ban Midori , Takahashi Hideyuki	4. 巻 -
2. 論文標題 How does a mother perceive her child's mind? Developmental changes in child behaviours that enable mothers to perceive their child's minds	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Early Child Development and Care	6. 最初と最後の頁 1~11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/03004430.2022.2055006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 BAN Midori , IKEDA Ryoma , TAKAHASHI Hideyuki , KOHYAMA Takaya	4. 巻 20
2. 論文標題 The Effects of Synchronized Upper Arm Movements on Psychological and Behavioral Aspects of Interpersonal Interaction	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Transactions of Japan Society of Kansei Engineering	6. 最初と最後の頁 213~219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5057/jjske.tjske-d-20-00058	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ban Midori, Uchiyama Ichiro	4. 巻 なし
2. 論文標題 Developmental changes in toy preferences during pretend play in toddlerhood	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Early Child Development and Care	6. 最初と最後の頁 1~10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/03004430.2020.1838497	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伴 碧
2. 発表標題 宗教的信念の形成・獲得に対する発達科学アプローチ
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本間 拓人 , 高橋 英之 , 伴 碧 , 島谷 二郎 , 福島 宏器 , 守谷 順
2. 発表標題 リモート対話場面におけるロボットを活用した批判的思考課題の効果
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mayu Koike, Midori Ban, Steve Loughnan
2. 発表標題 Defining the Emotion 'Moe' in a Cross-Cultural Perspective
3. 学会等名 IACCP 2022 - 26th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本間 拓人, 高橋 英之, 伴 碧, 島谷 二郎, 福島 宏器, 守谷 順
2. 発表標題 リモート対話場面でロボットを活用することによる批判的思考・メタ認知能力の変化
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中山 一輝, 高橋 英之, 石川 悟, 伴 碧, 石黒 浩
2. 発表標題 内なる表象の解読 -内的な心理過程の多様性について-
3. 学会等名 日本認知科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伴 碧
2. 発表標題 我々は和菓子に四季を感じるか - 幼児, 成人, 高齢者を対象とした発達の検討 -
3. 学会等名 第89回日本応用心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伴 碧
2. 発表標題 心理学と工学の接点
3. 学会等名 第67回システム制御情報学会研究発表講演会 (SC1)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------